

産産洞だより

■ 岐阜環境医学研究所・産産洞診療所
 ◎ 呼吸器疾患・禁煙治療・漢方相談
 診察日：月曜・木曜・金曜
 受付時間：9:00~12:00
 〒502-0017 岐阜市長良雄穂878-16
 IP Tel:058-295-9545
 FAX:058-296-3903
 E-mail:zazendoh@ccn.aitai.ne.jp
 http://zazendoh.town-web.net/
第126号 2014.9.1.
 毎月1回発行 産産洞診療所 松井英介



私たちは子どもを産まない

松井英介

「私たちは子どもを産まない！」

衝撃的なこの言葉は、自国の原発推進政策に抗議して、約4000人の女性たちがまとめた宣言の要でした。

この運動はフィンランドの地方大学で生物学を専攻する女子大生が中心になって始められたといえます。1986年6月初め。チェルノブイリ原発事故が旧ソ連ウクライナで発生したのが同年4月26日でしたから、当時人類史上最大といわれた過酷事故からわずか1ヶ月あまり後に、彼女たちは署名を集め、この抗議の宣言を政府に突きつけたのです。

「1990年末までに4基の原発すべてを廃炉にせよ、それがうけいられなければならない『私たちは子どもを産まない』」。署名用紙の、廃炉を求める理由はつぎのようでした。

「私たちは『原子力』を生命の連鎖を断ち切るような技術と捉えているからだ。原発の操業を許すことは、とりもなおさず死の灰(=核廃棄物)を生産することにほかならない」。

このエピソードを私は、綿貫礼子の本で知りました。

「放射能汚染が未来世代に及ぼすもの—『科学』を問い、脱原発の思想を紡ぐ— (2012年) 新評論, P.103-4)。

膝がんと病んでいた彼女は、2012年1月30日84歳の誕生日(3月5日)を前に帰らぬ人となりました。彼女はつづけてつぎのように書いています。「彼女たちの主張はこの一点に集中していた。つまり、事故の有無にかかわらず、原発の存在そのものが反生命的であるという主張」。

さらに、翌1987年アムステルダムで開かれた科学者・NGO共済の「チェルノブイリ会議」の印象的なエピソードを紹介しています(同上書P.104-5)。

「この会議は、妊婦へのX線照射が小児がんのリスクを高めることを1950年代に疫学的に実証したアリス・スチュワートをはじめ、ロザリー・パーテル(放射線疫学者)、アーネスト・スターングラス(放射線物理学者)、市川定夫(放射線遺伝学者)が中心になって討議が進められた。少ない情報を如何にして共有して行くか、生殖に関する健康被害の実態は如何なるものかということが議論の焦点となった」「東側のポーランドから産婦人科医師の女性がこの会議に参加したことは参加者に驚きと感銘を与えた。彼女はどのように『壁』を超えてきたかは聞かないでほしいと言った。チェルノブイリ事故による放射能が難なく国境を越えただけでなく、『東西の壁』をも超えさせるほどの大惨事であり、女性たち、医師たちに大きな衝撃を与えたのだと実感させられる出来事だった」。

3.11東電福島原発カストロフ後、女子中学生が口にしたつぎの言葉に、私たちは今一度、否、何度でも、謙虚に耳を傾けなければならないのではないのでしょうか。

「私たち、子どもを産んで良いのでしょうか？」。